（仮称）鹿角市学習文化交流施設基本設計プロポーザル

文化交流の杜　ー　出逢い賑わい夢をかなえるまち「鹿角」市民の新しい文化・交流の舞台　ー

鹿角市のシンボルとなる文化交流拠点を創出

● 山なみに抱かれた文化交流の杜

・みんなでつくり、みんなが集まる大屋根
・尾去沢鉱山をシンボライズした緑青屋根
・旧関善周辺の景観スケールを反映した立面計画
・伝統文化財花輪ばやしを継承する二極の都市構造創造
　「あんとらあ」を対極として

● ゆるやかなゾーニング

・内外に渡る空間をわかりやすくつなげる交流広場
・多用途に使いこなせる諸室の配置
・市民共動による日常の舞台の実現

● 出逢い、にぎわいの創出　ー市民との共動ー

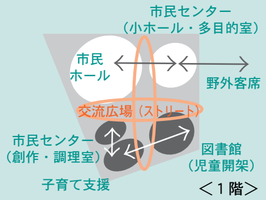
交流広場を中心に、各施設に共通する諸室を隣接させ、利用効率、相乗効果の向上を意図した構成を提案します。
交流広場に対して具体的にどのようにスペースを配置するか、実際に利用される市民の方々のアイデアを取込むべく、設計初期段階からワークショップを企画します。

「２階」

集客力のある図書館（一般開架）を２階に配置。市民センター（会議室・和室）を隣接させることで、図書館の管理区分内の学習室としての利用が可能に。
図書館資料を活用した学習が行われるなど相乗効果が期待できます。

「１階」

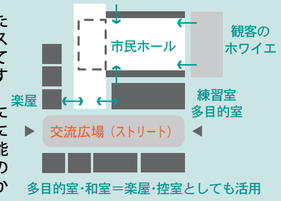
交流広場から市民活動が「見る」「見られる」の関係となる諸室配置。市民ホールと小ホール、多目的室を隣接させ、芸術文化の創造・地域活性化の拠点とします。
子育て支援と市民センター（創作・調理室）、図書館（児童開架）を隣接させ、世代を越えた連携のしやすさを創出します。



＜図－１＞フロア構成

● 市民活動の中心「交流広場」　ー日常の舞台としてー

各室に特定用途だけを持たせるのではなく、多様なスペースが交流広場に面して顔を出し、賑わいを創出する諸室構成（＝日常の舞台）を提案します。室名にとらわれず、市民の目的に応じて様々な使い方が可能な施設のあり方は、市民のアイデアを引き出すきっかけとなります。



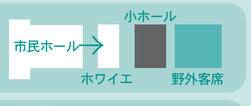
＜図－２＞交流広場と諸室

● 中心市街地の活性化を促す「市民ホール」の多様な展開

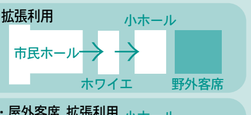
プロセニアム型ホールの基本性能を確保した上で、多様な利用ができるように、平土間＋ユニット式可動段床客席を採用します。
ホワイエや小ホール、屋外交流広場は、扉の開閉により一体化でき、フレキシブルな利用を可能（災害時の一次避難場所としても有効）とします。

Type A：通常利用
ホワイエは舞台と同じ大きさとし、リハーサル室としても利用

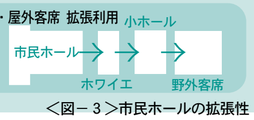
Type B：ホワイエ 拡張利用
市民展示、美術展、書初め大会など中規模のイベントに利用



Type C：ホワイエ・小ホール 拡張利用
産業展示、レセプションなど大規模のイベントに利用

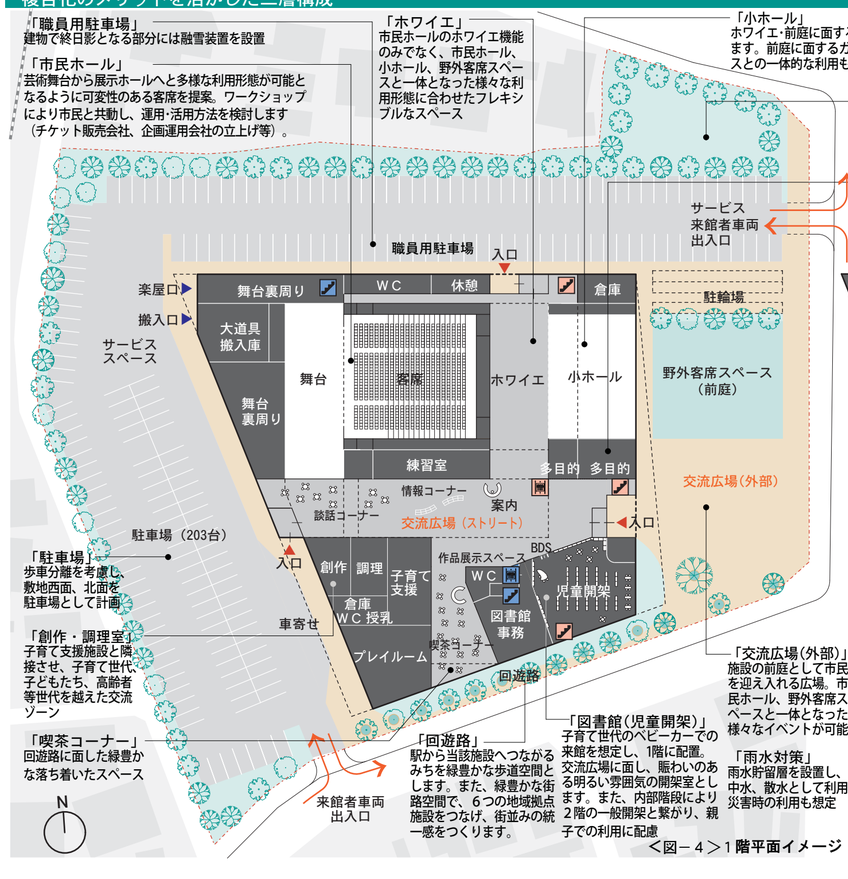


Type D：ホワイエ・小ホール・屋外客席 拡張利用
祭りなど市民ホールから野外客席まで一体となったイベントに利用

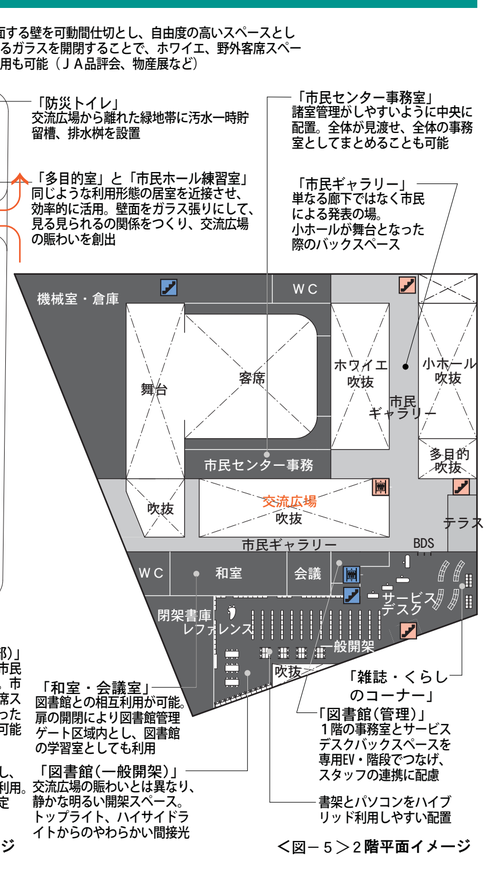


＜図－３＞市民ホールの拡張性

複合化のメリットを活かした二層構成



＜図－４＞１階平面イメージ



＜図－５＞２階平面イメージ

市民が文化・芸術・知にふれる場・市民の文化創造の舞台

● 図書館

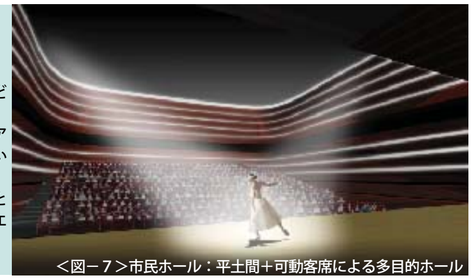
印刷媒体とデジタル情報の双方をハイブリッド利用しやすい開架スペース
課題解決型図書館として書架とパソコン席を近い関係に。

弊社設計事例

＜図－６＞明るい一般開架室：書架とパソコンをハイブリッド利用しやすい

● 市民ホール

中心市街地の活性化を促す「多目的ホール」
音楽芸術舞台から地域産業品評会などを行える多目的ホールを計画します。
可変性能のある座席、可動プロセニアムの採用により、空間的可変性の高いホール空間を実現します。
晴れの舞台としての劇場空間、日常とは異なる高揚感を感じさせるホワイエ空間を提案します。


＜図－７＞市民ホール：平土間＋可動客席による多目的ホール

● 交流広場（ストリート）

「見る」「見られる」の関係をつくる
市民の共同性のなかで誰かに見られる、見守られるということが重要です。市民の日常の活動自体が発表の場となるようなオープンな「交流広場」を計画します。新しい市民活動が創造されるために、諸室の組み合わせを市民と共動して計画し、文化創造のストリートとして賑わいのある空間をつくります。

＜図－８＞駐車場側入口からみた交流広場

● 交流広場（外部）

建築内外で一体となる広場
施設の前庭として、市民ホール、ホワイエ、小ホールを開放し、多目的なイベントが交流広場と一体で開催できるように計画します。
市民が積極的に活用し、市民同士の交流の場とするために、市民と共動して計画します。

＜図－９＞交流広場からみた野外客席スペース

地域特性を生かした環境・省エネ設備計画

● 地域間伐材、地下水利用

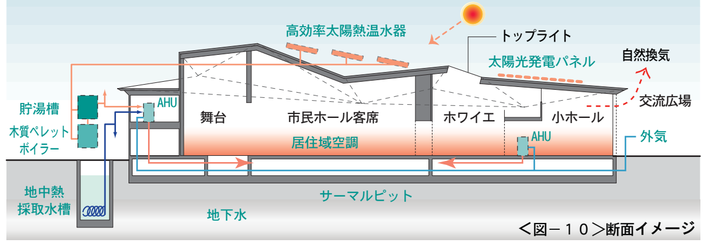
供給体制が整いつつある木質バイオマスエネルギーを暖房熱源とします。高性能太陽熱温水器を併設することで、太陽エネルギーを有効に採熱して高温水を作ります。ペレットボイラーと組み合わせることで、温暖化ガスの発生量を限りなくゼロに近づけることが可能です。
夏季は地下水による良質な地下熱を熱源とし、合わせてサーマルピット外気冷却を行います。夜間には室内を外気で冷却蓄熱するナイトパージモードを採用します。前述の太陽熱温水器と木質ペレットボイラー、さらには吸収式冷温水発生器と組み合わせることで、100%自然エネルギーによる冷暖房システム（＝ゼロエミッション）が実現可能です。

● 節電・停電対策

電力情勢は今後さらに厳しい状況になるものと予測されています。自然エネルギー利用に加え、ＬＥＤ照明をはじめとする高効率機器、及び無駄を排除しエネルギー管理を行う自動制御システム「ＢＥＭＳ」を採用します。停電対策として、最小限の発電設備、蓄電設備を設置します。

● 維持管理費の縮減、市民参加による運営管理

ＬＣＣの縮減は主として費用対効果と効率的運用の二つのテーマに集約されますが、類似施設のＬＣＣは一般的にランニングコストがイニシャルコストの４倍を占めています。
イニシャルコストのみにとらわれず、自然エネルギーの活用や断熱性能などの建物仕様を重視することで、ＬＣＣ全体の２４％縮減を目指します。
維持管理においては、可能な限り市民が参加しやすい施設計画とします。特にホール利用については、空調や照明など、簡便に操作可能なものにします。



＜図－１０＞断面イメージ